

2007年2月2日(金)19:00~20:20

以下A()記載

葉山：田辺製薬株式会社 代表取締役社長 葉山 夏樹

小峰：三菱ウェルファーマ株式会社 代表取締役社長 小峰 健嗣

土屋：田辺製薬株式会社 代表取締役専務執行役員 土屋 裕弘

吉村：株式会社三菱ケミカルホールディングス 取締役常務執行役員 吉村 章太郎

中山：株式会社三菱ケミカルホールディングス 常務執行役員 中山 清

【事業計画について】

Q / 2010年時点の営業利益目標を1,050億円と掲げているが、最低限、ここまでやるという数字か。

A / (葉山) 1,050億円の目標は経営の強い意志である。

Q / 新会社の2010年度の売上高目標4,700億円は、2005年実績合算4,078億円に比して約600億円プラスになっている。増収が見込めないなかで、どのような算定をしているのか。

A / (小峰) MR2,600人という営業力を活かすことができれば、まだまだ伸びしろのある製品はある。個別の製品では、営業施策次第で伸びを示すことができる。

Q / 具体的に、アルプレックや現在開発中のものは、どの程度売上の伸びに織り込んでいるのか。

A / (葉山) 売上計画の詳細については5月に事業計画の中で回答させていただきたい。

Q / 三菱ウェルファーマのFTY720のロイヤルティは、2010年度営業利益目標の1,050億円の中に入っているのか？

A / (小峰) 若干入っている。

Q / 新会社のフランチャイズ領域は、具体的にはどこになるのか。

A / (土屋) 現状の両社のパイプラインで、重点領域として一致しているのは、呼吸器、免疫・炎症、循環器。それ以外に泌尿器等いろいろある。今後、戦略的に検討していく。

Q / 現在、開発パイプラインにあるものや、場合によっては販売している製品を売却するなど、絞込みもありえるのか？

A / (土屋) 現状でパイプラインにあるものを、研究開発から営業まで視野に入れ、トータルで企業価値を高められるよう判断したい。

Q / 三菱化学グループとのシナジーを期待するスライドは、三菱ウェルファーマの説明会でも同様のものがあつたが、田辺製薬からみて、三菱化学グループとのシナジーはどうか。

A / (土屋) 田辺製薬としても三菱化学グループが持つ基礎的な研究には魅力がある。三菱化学生命科学研究所やゾイジーン、三菱化学科学技術研究センター等とは、新

会社の創薬において、シナジー効果が十分に期待できると考えている。

Q / 創薬力強化、海外展開加速化を目指す上で、医療用医薬品事業以外の事業はどうするのか。

A / (葉山) 田辺製薬は、動物薬事業やフードケミカル事業等を既に整理してきた。O T C 事業、ファインケミカル事業はともに縮小均衡させ、バランスをとりながら事業を継続してきた。セルフメディケーションと言われて久しいが、今後、O T C 事業を持っていること、特に、スイッチ O T C を持っていることで、チャンスが必ずくる。生活者に役立つ薬を提供でき、かつ、少しでも確実に利益を出すことができれば、その事業は社会の役に立つものであり、存在価値があると考えている。今後、O T C 事業を継続していく中で、更に良いスキームがあれば、あらためて考えていく。

(小峰) 三菱ウェルファーマは事業の集約に向けて大きく動いてきた。「選択と集中」はかなり進んできている。ファインケミカル事業は、医薬品原薬のウェイトを高める方向で維持していく。どのように展開するかは、今後検討を重ねていく。

Q / 配当や R O E 等、投資家からみて分かりやすい指標を示さないのか。

A / (葉山) 本日、合併に向けて基本合意に調印したばかりであり、検討課題である。新会社の配当政策と田辺製薬の配当政策との関連性については、十分留意して検討したい。現時点での数値の詳細は控えさせていただく。

Q / 田辺製薬の株主がこの合併に関して、賛成、反対の判断材料とするための事業計画の発表はいつか。

A / (葉山) 5月の合併契約書締結の時点でより詳細な計画を発表し、株主の皆様にご判断いただく。また、機関投資家およびアナリストの皆様には、5月に説明会を開催したいと考えている。

【販売シナジーについて】

Q / 70 億円の販売シナジーは、支配権移動などのリスクを織り込んだ後の数字か？

A / (小峰) 現時点で可能な限り織り込んでいるが、ディスシナジーも配慮した上で出しているので、達成できる数字と考えている。

(土屋) 販売シナジー 70 億円には、現時点で予測されるリスクを織り込んでいる。ただ具体的な品目については、契約の関係上、お答えできない。

Q / 今回の支配権移動に伴って、レミケードの販売権および CNT0-148 の開発・販売権はどうなるのか。また、合併に伴う支配権の移動に伴って販売権に影響がある製品は何か。

A / (葉山) 個別の契約内容および具体的な品目については、導入先との守秘義務があり、コメントを差し控えたい。ただ、レミケードの売上がなくなることはない。

Q / M R は両社合わせて 2,600 名という人数を維持するのか。

A / (小峰) まず、どのように2,600名を活かすかを考える。その延長線上で適正要員数という課題も出てくると思うが、合併準備委員会の中で検討していく。

Q / MR数が多くなるが、過去の例からMRの生産性低下が懸念される。今回も主力製品が多岐にわたるため、MRの効率が落ちるリスクが高いのではないか。

A / (小峰) これまでの経験を今後を活かしたい。MRの生産性については、現在は中堅企業としての水準であり、大手と比較すると弱含みであるが、2,600名という大きな営業力によって、今以上の生産性を求めることができ、個々の分野においては一番手になれる。専門性を高める等、マーケティング手法が成功すれば、かなりの部分は克服できると考えている。

【コストシナジーについて】

Q / コストシナジー130億円はどのようなペースで出るのか。前倒しか、それとも後半が大きくなるのか。

A / (葉山) コストシナジーの詳細については、今後合併準備委員会でより詳細に検討したのち、具体的にお話したい。

Q / 従業員数は何名程度を想定しているか。今回示されたコストシナジー130億に織り込まれているのか。

A / (葉山) 本体および出向者は両社合わせて7,500名である。2010年度には6,500名を想定している。連結でみた場合の両社の関係会社等については、今回の数字の前提には織り込んでいない。今後の検討課題である。また、コストシナジーの詳細については、合併準備委員会で更なる検討を行ったうえで、5月に説明したいと考えている。

Q / コストシナジーを考える上で、工場を閉める、研究所を統合するなど、はっきりしたコストカットが示されていない。

A / (葉山) 具体的には合併準備委員会で検討を行う。

Q / 2010年計画で、研究開発費の伸びは約60億円と低いが、研究開発費にもコストシナジーが働くのか。

A / (土屋) 研究開発費は一般的に多ければ多いほうがよいと言える。具体的には事業計画を検討する段階で考える。当面は850億円程度であろう。研究所の統廃合等、効率化が進めばコストシナジーが期待できると考える。

【海外展開について】

Q / 合併の意義について、グローバル展開をするための規模をあげているが、2010年で十分な規模に達したと考えるのか。それとも、さらなる規模拡大が必要なのか。

A / (小峰) 開発候補品を創製して、継続して海外で開発していくためには、クリティカルマスとして、研究開発費は1,000億円程度必要だと従来から説明している。今回示した数字は必要最低限の規模として、本格的にグローバル展開できる体制に育

てていきたい。2010年でようやくこの規模に肉薄できる体制ができると考える。
(葉山) 田辺製薬では、自社創製品の中に、海外での自社開発に入ったものが出てきた。これまで海外では、すべてを自社開発することは難しかったが、新会社では、例えば、重点領域については海外で最後までやっていくこともできる。研究開発費300億円という田辺製薬単独ではなしえなかった選択肢が広がった。

【ジェネリック事業について】

Q / 2010年度目標売上高のうちジェネリック事業の売上はどの程度見込んでいるのか。

A / (葉山) 2010年度目標には織り込んでいない。

Q / ジェネリック事業について、三菱ケミカルホールディングスグループの中期経営計画では距離を置いていたと思うが、考え方が変わったのか。

A / (葉山) 新会社として、当初はジェネリック事業を新会社の下で育成していきたい。

(小峰) 将来的には、新会社の中でやるのか、外に出すのか、三菱ケミカルホールディングスグループとしてやるのか、いろいろな方法があり、今後検討していく。

Q / MR数が大きくなるので、その一部を切り離してジェネリックをやることは考えているのか。

A / (葉山) 考えていない。

【合併比率について】

Q / 実際に合併する際に、田辺製薬の株価が現在の1,600円より下がっていても、1対0.69の比率で成立するのか。

A / (小峰) 合併比率については、ファイナンシャルアドバイザーによって、いろいろな方法論・バリュエーションから出された数値を参考にしながら、また、田辺製薬との交渉を重ねるうち、三菱ウェルファーマとして納得できるとの判断で進めてきた。妥当だと判断している。株価だけで判断したものではない。

(吉村) 合併比率については、小峰社長が説明したように、いろいろな角度から検討した結果、妥当だと判断した。今後の株価変動によって、その妥当性が壊れるものではない。

Q / 田辺製薬の中期経営計画では、2010年度目標の営業利益が350億円で純利益が220億円であり、EPSが90円程度である。これに対して、新会社の2010年度目標の営業利益は1,050億円で、実効税率を40%程度とみれば、EPSが112-113円程度と予想される。この前提で考えれば、本合併によって、現在の田辺製薬の株主からみて、25%のプレミアムがついたと考えてよいのか？

A / (葉山) EPSは今後向上させたいが、1,050億円の営業利益は現段階のシミュレーションの結果である。

【企業結合会計について】

Q / のれんは 2,000 億円程度とみてよいか？

A / (葉山) のれんの金額、償却年数は、決まった時点で適切に開示させていただく。のれんの償却によって会計上の営業利益が低下することは確かであるが、合併によるシナジーがそれを上回ると考えている。

Q / 今回のスキームで、パーチェス法の適用により三菱ケミカルホールディングスのバランスシートに与える影響はどの程度か。

A / (吉村) 三菱ケミカルホールディングスは新会社の株式を 50% 超保有するため、新会社は連結子会社という位置付けになり、総資産、負債が連結対象となる。新会社では、企業結合会計の基準により田辺製薬の資産を時価評価し、時価純資産と株式時価総額との差額をのれんとして認識する。三菱ケミカルホールディングスでは、持分相当分ののれんが資産に計上される。のれんの額については、現時点で数字を申し上げるのは控えさせていただきたい。純資産の部分の増加は、株主資本の増加と少数株主持分の増加に分かれるが、これについても数字については控えさせていただきたい。

【上場維持問題について】

Q / 現行の三菱ケミカルホールディングスグループの中期経営計画で掲げるヘルスケア戦略を展開する上で、「三菱ケミカルホールディングスの持株比率を原則 10 年間変更しない」という条項が足かせになることはないのか。

A / (小峰) 田辺製薬を存続会社として、上場を維持するために持株比率を原則 10 年間維持するということを書き加えている。ただ、世の中の変化が激しくなっており、また、更なる展開という状況が仮に生まれた際には新会社として検討することもあり得る。ただ、現時点では、この合併を成功させることが最も重要なテーマである。

Q / 東証から、不適当な合併等にあたるとのコメントが出ているが、クリアできるのか。

A / (葉山) 東証とは相談している。新会社は上場を維持することを第一義として考えている。上場を維持できると確信している。

【今後のM & Aについて】

Q / 新しいM & Aをするときに、三菱ケミカルホールディングスグループとして、どのくらいの資金を動かすことができるのか。

A / (吉村) 対象によるので、回答しづらい。三菱ケミカルホールディングスグループのコア事業である医薬であれば、ポートフォリオ、戦略の観点で先行することだが、かなりの金額を動かすことができる。

Q / 三菱ケミカルホールディングスは、これまで金庫株は医薬再編に使うと言っていたが、今回の合併で金庫株を使わないとすると、残っている金庫株はどうするのか。

A / (吉村) 従前から、金庫株は戦略的投資によって企業価値向上に活用すると明言してきたが、まずは医薬のアライアンスを優先にと考えてきた。今回の医薬のアライアンスは金庫株を使わないで実現できるので、新会社発足を目処に、保有している

金庫株の相当部分の消却をする方向で検討する。残りは、医薬、化学と広い分野で戦略的投資をあらためて検討したい。2007 年前半に方針を決定し、説明したい。

Q / 三菱ケミカルホールディングスの持株比率を 10 年間は変更せず、金庫株も消却するという事は、更なる医薬の再編は、当面行わないということか。

A / (吉村)三菱ケミカルホールディングスとして、金庫株は戦略的に医薬のアライアンスに優先的に使うためのもので、もともと長く保有するつもりはなかった。次のアライアンスのときに必要があれば、時価発行増資するなどの方法もあり、そのような場合においては株主の理解が得られると思われる。

Q / 三菱ケミカルホールディングスのヘルスケアセグメント子会社の統合はさらに進むのか。

A / (中山)そこまで踏み込んで検討していない。現時点では、組織体制は変わらないとご理解いただきたい。

【その他】

Q / M & A を検討する過程で、お互いの会社以外に考えたケースはあるか。

A / 具体的に検討したことはない。

以上